

- ①北海道: 司馬政一(幼保連携型認定こども園せいめいのもり清明学園理事長・園長)、木村隆志(幼保連携型認定こども園せいめいのもり学年主任)、相原愛実(幼保連携型認定こども園せいめいのもり教務部部长)

**テーマ:『生き抜く力』を育てる園庭改革とは～**

子どもの心が育つ環境は、効率重視でもそのための IT 化でもなく、自然的環境の中でどろどろになって人間同士がもみくちゃになって生活することこそ、最も大切なことと捉えている。本園は都心部に近い立地のため、昨年8月に井戸を掘って川をつくり、植栽を行い、物見台などを作成する等の大規模な園庭改造を行った。そこで、教職員が園視察や研修を重ね、子ども自らの物差しを持ち遊び込める環境を整えた過程と課題、保育者としての思いを発表したい。

- ②山梨県: 吉川和幸(帝京科学大学准教授)、中川絵理(北海道・美晴幼稚園教頭)、東 重満(北海道・美晴幼稚園園長)

**テーマ:障害のある幼児に対する「信頼モデル」に基づく個別の指導計画及び保育記録①**

障害のある幼児の個別の指導計画及び保育記録の様式の検討は、幼児期の特別支援教育における重要な課題である。美晴幼稚園では、2015 年度に研究者との協働により、障害のある幼児を対象とした「信頼モデル」に基づく個別の指導計画及び保育記録の試案を作成し、実践研究を行った。研究発表①では、美晴幼稚園の特別支援教育の状況と、「信頼モデル」に基づく個別の指導計画及び保育記録の様式と、その理論的背景について報告する。

- ③北海道: 疋田真梨(美晴幼稚園主任教諭)、佐藤由望(美晴幼稚園教諭)、赤石彩那(美晴幼稚園教諭)、中川絵理(美晴幼稚園教頭)、東 重満(美晴幼稚園園長)、吉川和幸(帝京科学大学准教授)

**テーマ:障害のある幼児に対する「信頼モデル」に基づく個別の指導計画及び保育記録②**

障害のある幼児の個別の指導計画及び保育記録の様式の検討は、幼児期の特別支援教育における重要な課題である。美晴幼稚園では、2015 年度に研究者との協働により、障害のある幼児を対象とした「信頼モデル」に基づく個別の指導計画及び保育記録の試案を作成し、実践研究を行った。研究発表②では、3 名の障害のある幼児に対して行った実践の経過と、実践に対する保育者の振り返りについて報告する。

- ④北海道: 中川絵理(美晴幼稚園教頭)、東 重満(美晴幼稚園園長)、逢坂奈津子(美晴幼稚園教諭)、田辺麻衣(美晴幼稚園教諭)

**テーマ:障害のある幼児に対する「信頼モデル」に基づく個別の指導計画及び保育記録③**

障害のある幼児の個別の指導計画及び保育記録の様式の検討は、幼児期の特別支援教育における重要な課題である。美晴幼稚園では、2015 年度に研究者との協働により、障害のある幼児を対象とした「信頼モデル」に基づく個別の指導計画及び保育記録の試案を作成し、実践研究を行った。研究発表③では、2015 年度の実践結果と反省を踏まえて、2016 年度から開始した新たな実践の経過について報告する。

- ⑤北海道: 坂本歩美((学)リズム学園恵庭幼稚園特別支援コーディネーター)、山形 彩(恵庭幼稚園教諭)、井内 聖(恵庭幼稚園学园长)、吉川和幸(帝京科学大学准教授)

**テーマ:特別支援コーディネーターを活用したケース会議の取り組み方**

特別な支援を要する園児の支援のあり方について具体的事例の研究や検証はされているが、園内においてケース会議をどのように開催し、組織としてどのように取り組んで行くかという事例は少ない。本研究では、ある園児を対象にした 2 年間のケース会議から支援の具体的方法を通して特別支援コーディネーターを活用したケース会議の取り組みについて考察していきたい。

- ⑥静岡県: 杉山季穂(常葉大学短期大学部附属たちばな幼稚園教諭)、石上彰子(常葉大学短期大学部附属たちばな幼稚園教諭)、佐藤幸代(常葉大学短期大学部附属たちばな幼稚園主任)

**テーマ:保育にいかず記録のとおり方**

友だちとの積極的なかわりもなく、一人でいることの多かったAちゃん。そんなAちゃんに「友だちと夢中になって遊べるようには、どうしたらいいの?」と、援助についての手立てを考えてきました。Aちゃんについての研究を深めるにつれ、Aちゃんは私たちに「子どもにとっての育ちとは?」「保育にいかず記録とは?」と、問いかけをしてきました。本実践は、この問い直し、子どもたちと一緒に手探りで試行錯誤をしながら取り組んでいる中身の紹介です。

- ⑦神奈川県: 土井敬喜(南大野幼稚園教務主事)、伊藤千春(南大野幼稚園学年主任)、鈴木理恵(南大野幼稚園学年主任)

**テーマ:園内研修をチームティーチングから考える～保育者同士の協同的学びを目指して～**

園内研修を「会議」と呼んでいる幼稚園もたくさんあると思う。そもそも「会議」とは『関係者が集まって相談をし、意思決定することである』といわれている。南大野幼稚園の会議は、いつも発言する人が決まっていて新任や経験の浅い保育者は黙ってうつむいて座っていることが多かった。『相談をし、意思決定をする』という意味

にはほど遠く『相談』というより決定事項の『連絡会』のようであった。もっとみんなの話が聞けたら…それぞれの  
知恵が集まれば新たな子ども観や価値観を得られるのではないだろうか？と考え始めた。

- ⑧東京都:黒崎知子(武蔵野東第一・第二幼稚園学年総主任)、戸田裕美子(武蔵野東第一・第二幼稚園年長  
副主任)

**テーマ:教育の質の向上を目指した日常の会議**

私たち教師は、日々の保育のために、保育時間後には様々な書類の作成や環境の用意など、準備や振り  
返しをする中で、会議をする時間も設けて情報を共有している。その日常の会議が情報伝達場で終わらずに、  
保育者同士が活発に意見を交わし合い、気づきや新しいアイデアを生み出す場とすることを目指し、会議の時  
間や内容、方法などを工夫して取り組んできた。「会議の質の向上→教師の質の向上→教育の質の向上」へと  
つながると考え、取り組みをまとめた。

- ⑨北海道:小縣美沙(札幌ゆたか幼稚園教諭(学年リーダー))、渡部里美(札幌ゆたか幼稚園教諭)、板垣奈菜  
(札幌ゆたか幼稚園教諭)

**テーマ:遊びが広がる環境づくり**

本園では子ども達の自由選択活動での育ちに目を向け、日々の遊びの様子を写真に収め、それらを基に4  
つの“遊びのチーム”に分かれ、毎日10分間の研修時間を設けて話し合いや振り返りを行っています。「遊び  
が深まるには何が必要なのか?」「今後どのように展開していくのか?」等々、子どもが遊んでいる姿から“考え  
たり”“予想したり”することで、遊びが広がる仕掛け作りや道具の準備等をする時間としています。「保育者自身  
の遊びの引き出しが乏しい…」等々、課題は沢山ありますが、試行錯誤しながら日々チームで話し合っている  
ことについて発表したいと思います。

- ⑩和歌山県:久保玄理(小田原短期大学専任講師)

**テーマ:支援学級生による幼稚園児への造形制作指導**

28年2月中学の支援生徒たちが2幼稚園を訪れ、プラスチックを利用したプラ板作成指導を行った。その時  
の制作の様子を幼稚園児たちと支援学級生の両方向から報告し、実践活動を総括したい。また研究者の方々  
のご意見を伺う場ともしたい(パネル・写真・新聞記事・テレビ映像などを使用予定)

- ⑪兵庫県:岡 紗也子(幼保連携型認定こども園はまようちえん保育教諭)、西浦友梨(幼保連携型認定こども園  
はまようちえん主任・保育教諭)

**テーマ:異年齢保育はじめました。～本格実践まる一年編～**

昨年度より一新した環境(保育室間に壁のない室内、回遊性のある多様な屋外環境)こども環境学会デザ  
イン奨励賞)で始めた3～5歳児の異年齢保育。今回は、本格実施初年度を終えた一年間の実践から、「子ど  
もの育ち」についてフォーカスし、異年齢ならではの気づきや課題を発表する。新たに始めた0～2歳児との関  
わり、4歳児の立ち位置やカリキュラム編成の課題など、多角的な視点から現時点のはまようちえんの保育を俯  
瞰する発表となる。

- ⑫兵庫県:片岡章彦(芦屋学園短期大学専任講師)、古川智規(立花愛の園幼稚園教諭)

**テーマ:4歳児の製作遊びについて**

子どものあそびの中でも製作あそびは、どこの園でも遊びのコーナーの一つとして位置づけられ、年間を通  
して継続して展開されている。そして、製作遊びが継続されている以上は、製作遊びの環境の準備と展開の計  
画が不可欠である。しかし、遊び環境の準備は秋の落ち葉や木の実等を除けば、年間を通してあまり変化が見  
られずマンネリ化しているのが実際である。そこで、製作遊びの環境がマンネリ化する要因を考察するとともに、  
特に4歳児における主体的な取り組みとなる製作あそびの環境構成のあり方について実践発表を行う。

- ⑬北海道:山中健司(旭川ふたば幼稚園園長)、島 唯菜(旭川ふたば幼稚園教諭)、大立目彩(旭川ふたば幼  
稚園教諭)

**テーマ:子ども達が遊び込める環境づくり**

去年から、道内外の園を見学させて頂き、園内での研修を通して“子ども達が遊びこめる環境とは”どんな環  
境か職員で考え、園庭や室内の環境を子ども達の様子を見ながら変えていきました。戸外では、2種類の砂場  
を使い分け、おままごと・トンネル作り・樋を使って水の流れを楽しみ、室内では遊びをコーナー化することでよ  
り集中して遊べるようになりました。今後もより良い環境を目指して職員一同、頑張っていきたいと思います。

- ⑭佐賀県:松枝里美(学校法人高岸幼稚園教諭)、田中康平(高岸幼稚園講師)、田中宣子(高岸幼稚園講師)

**テーマ:年長児の協働的な活動におけるICTの活用**

平成26年度より「ICTタイム」という活動を取り入れ、年長クラスにおける新たなカリキュラム開発に取り組んで  
いる。人間関係形成やツールを相互作用的に用いる力などの育成を目的とし、タブレット端末等 ICT の活用も  
含めた協働的な活動を展開している。独自のカリキュラムをベースにした指導案の作成と省察を繰り返し、改善

を重ね、園児の育ちや学びに寄与する様に努めている。

- ⑮兵庫県:難波義晴(学校法人あけぼの学院認定こども園武庫愛の園幼稚園)、松岡 護(学校法人あけぼの学院認定こども園武庫愛の園幼稚園)

**テーマ:「室内遊びにおけるコーナーの在り方と保育者の役割」**

本研究は、2年前に小川博久先生・岩田遵子先生に自園の保育を見て、直接ご指導頂いた事から始まった。幼児が生活する保育室が安心できる居場所となっているのか?幼児自らの動機で活動に取り組む場となっているのか?という視点から改めて保育環境を見直す事にした。以前の室内遊びにおける保育環境は、幼児一人ひとりが好きな遊びを見つけられるよう数多くの遊びが敷き詰められるように配置されていた。現在は基本的に製作コーナー・ブロックコーナー・ままごとコーナー(+α)であり製作コーナーをベースキャンピングにブロック・ままごとコーナーは保育室の隅を利用して三角形の形に配置されている。各コーナーの特色を踏まえ、環境の変化における子どもの姿や保育者の役割について考えていきたい。

- ⑯大阪府:松田厚美(大谷学園大谷幼稚園教諭)、岡 佐智子(大谷学園大谷幼稚園園長)

**テーマ:廃材を利用した製作実践記録**

保育者の言葉がけがないと自分のイメージを形にできない子どもたちが多い現実がある。意欲的に造形活動に参加できる方法を見出すために、子どもたちの興味を活かし、消防署見学での実体験を題材にし造形活動を進めたところ、活発な活動風景が見られた。経験したことを図鑑でより細かく調べ、絵に表現し、さらに画用紙で壁面として消防車を作り、立体の造形へと進めた。主体的に取り組み、作品造りへ発展したので姿勢が見られたので発表する。

- ⑰大阪府:清水晶子(大谷学園大谷幼稚園保育主任)、岡 佐智子(大谷学園大谷幼稚園園長)、松田厚美(大谷学園大谷幼稚園教諭)

**テーマ:実践報告 お米作りからおにぎりまで**

お米を育て食べる事で、食・自然・文化などに直接触れることができると考える。できるだけ園児の目に触れながら稲の生長を確認する教育を目指した。園庭の側溝とお漬物用樽を使ってお米を作り、日常的・継続的にお米の生長に関わった。田植え、水やり、稲刈り、脱穀、精米、おにぎり作り、脱穀後のわらでのリース作りまで体験した。観察日記を描く事で言葉や表現力を豊かにし、稲の生長は、環境、人間関係の領域への学びとなった。

- ⑱北海道:小田進一(北海道文教大学人間科学部こども発達学科教授・北海道文教大学附属幼稚園園長)、山本里美子(北海道文教大学附属幼稚園教諭)、細田菜津子(北海道文教大学附属幼稚園教諭)、菊池華永(北海道文教大学附属幼稚園教諭)

**テーマ:「保育改善のための職員研修の取り組み」—幼稚園教育要領の読み込みとその後の保育—**

年間計画で、理念や幼稚園教育要領の理解に課題があると認め、園内研修計画を立てるが数年、実行が困難だった。ともかく全員で交互に音読し、個々が学んだこと、疑問点を書き留め発表しあう中で、教師一人ひとりが保育に向き合い、見直しが図られていった。理想と現実。今、具体的にできること、それぞれが思い、アイデアを伝え合ううちに、新たな保育の試みが生まれ、その保育は、こどもを、保育を、さらに教師を変え続けている。

- ⑲愛媛県:西川和加乃(晴心幼稚園教諭)、渡部小雪(晴心幼稚園教諭)、矢野萌伊(晴心幼稚園教諭)

**テーマ:本園の子育て支援の現状と課題**

本園では、子育て支援の一環として未就園児を対象とした園庭開放の他に、NP(ノーバディーズパーフェクト)と「あゆみカフェ」という場を設けている。保護者へのアンケート調査を行い、判明した現在の保護者の意見や要望をまとめた。平成29年度に認定こども園となるにあたって、今後子育て支援をどのように行うか、またその在り方について考えていきたい。

- ⑳福島県:長沼樹里子(認定こども園会津若葉幼稚園保育教諭)、立川美里(認定こども園会津若葉幼稚園保育教諭)

**テーマ:成長の芽生えを生かす保育と家庭との連携**

教育課程研究センター指定校事業の研究で、集団の幼児教育と共に、家族の理解・励まし・受容があると、幼児の自立と自律、自己発揮と自己抑制の心の成長はさらに加速することがわかりました。今年度からこども園となり、家庭との連携が重要です。適切な家庭との連携、幼稚園での成長が、卒園後の精神面、行動面の成長にどう影響したか、約10年間の卒園生の中から約120名を抽出してアンケートをとり考察を進めました。

- ㉑佐賀県:福元芳子(西九州大学附属三光幼稚園副園長・三光保育園園長・西九州大学子ども学部非常勤講師)

**テーマ:子どもの発達とメディアの問題**

三光幼稚園と隣接する三光保育園および子育て支援に通う1歳児から5歳児、あわせて425名の保護者を

対象に、子どもが平日・休日それぞれ 1 日にどのくらいテレビやスマホ等のメディアにふれる時間があるかや、就寝時間についてアンケート調査を行った。その結果から、子どもがメディアにふれる時間やそのうえで起きている様々な実態を把握し、子どもの発達とメディアの問題の関連性をさぐることを試みた。

- ②佐賀県: 福元芳子(西九州大学附属三光幼稚園副園長・三光保育園園長・西九州大学子ども学部非常勤講師)、杷野千晶(西九州大学附属三光幼稚園主幹教諭)、田代祐子(西九州大学附属三光幼稚園主幹教諭)  
テーマ: **新制度にともなう現場の保育者の葛藤と見えてきた課題について**

新制度になり、長時間過ごす子どもたちの生活がより豊かなものとなるように、様々な視点から「つながりのある保育とかかわり」というテーマで園内研究を行ってきた。その中で、担任と保育の時間(預かり保育)に携わる保育者との連携の仕方や、やり取りの中から見えてきた課題について考察する。

- ③鹿児島県: 餅井香織(認定こども園阿久根めぐみこども園指導保育教諭)、小田春菜(認定こども園阿久根めぐみこども園保育教諭)、前田真奈美(認定こども園阿久根めぐみこども園保育教諭)  
テーマ: **子ども主体の保育を目指して～新園舎工事前後での保育の変化～**

平成 26 年夏から園舎建て替えのため工事が始まり、平成 27 年 5 月より新園舎での保育が始まった。その間、限られた狭い空間でしか遊ぶことができず、外に出られない日も続いた。しかし、限られた空間、時間の中でも子どもたちが遊んでいる様子を見て、身近な環境を有効に活用したり今までの保育を見直したりしながら、子どもたちが伸び伸びと毎日を送れるように工夫していった。その期間があったことで、新園舎になってからも保育や遊びに対しての保育者の意識と考え方が変化していった。

- ④栃木県: 井上美佳(認定こども園七井幼稚園主任)

テーマ: **「進級式」— えっ 合格しないと進級できない? !**

自園の理念である「楽しく・たくましく」を基に毎年年度末に各年齢、発達に応じた内容を考え進級式というものを行っています。式に向け担任、子ども達は課題をクリアし合格をもらう為に練習を重ね、当日、理事長、園長、主任、保護者の前で式に臨みます。子ども達は式を通して技術を獲得し、進級に向け自信をつけます。この進級式という自園オリジナルの式の発表を通し、全国の幼稚園の先生方と意見を交換し、更に充実した保育実践を目指す為。

- ⑤兵庫県: 濱田 恵(神戸女子大学附属高倉台幼稚園主任教諭)、窪田由利枝(神戸女子大学附属高倉台幼稚園教諭)、小林美佐子(神戸女子大学附属高倉台幼稚園園長)

テーマ: **F i -Ⅲ保護者とのコミュニケーション 異年齢保育の質の向上を目指して—保護者も一緒に遊び考えよう—**

本園では、平成 17 年より主体的な遊びの充実を目指し異年齢保育に取り組んでいる。縦の人間関係の中から「人と関わる力」や「言葉の力」の育ちを捉え、環境や適切な援助を考察してきた。幼児教育は、保護者と価値観を共有し相互に連携していくことが育ちに繋がる。そこで、子育て支援の一環として、日々の保育を通して、保護者と共に幼児教育の大切さや子どもが育つ遊びを考察し、さらに異年齢保育の質を高めていく。

- ⑥兵庫県: 大瀬良知子(神戸女子大学附属高倉台幼稚園管理栄養士)、小林美佐子(神戸女子大学附属高倉台幼稚園園長)、栗原伸公(神戸女子大学家政学部教授)

テーマ: **A2-Ⅱ: 幼児の健康管理(健康管理実践) 食育(栄養管理)  
大豆製品に着目した好き嫌い改善と摂取頻度向上のための実施とその評価**

本園では、昭和 63 年より完全給食を実施している。また、食べることは生きる基本であるという理念に基づき、栽培活動など食育に関する活動を数多く実施している。大豆は植物性たんぱく質の主要な供給源であり、醤油や味噌など様々な食品に加工され、日本食に欠かせない食品である。しかし、日常の利用率は高いとは言えず大豆製品が嫌いな幼児も多い。このことから、大豆製品に着目することは幼児にとって重要な課題である。そこで、週 4 回実施している給食を活用し、大豆製品の利用促進と好き嫌い改善を目指した栄養教育を実施した。本研究は不二たん白研究振興財団研究助成により実施した。

- ⑦神奈川県: 佐藤友佳(宮前幼稚園年長学年主任・年長担任)、多賀萌未(宮前幼稚園年中学年主任・年中担任)、亀ヶ谷元謙(宮前幼稚園全体主任・年長担任)

テーマ: **クラスポートフォリオづくりを通して、保育の専門性を高める**

本園では、子どもたちの主体的なあそびを大切にしている。子どもたちが日々経験していることや学びを可視化するために、クラスごとに毎日 1 枚のポートフォリオを作成し、子どもや保護者が手にとって見られるよう掲示・ファイリングしている。今回の研究では、ポートフォリオ作成が幼児理解を深めたり、保護者との信頼関係を構築したり、保育の専門性を高めるためにどのような効果があるのか、またその活用方法を探っていく。

- ⑧熊本県: 大野江里子(画図幼稚園主幹教諭)

テーマ: **個別指導を取り入れた特別支援教育の試み(第2報)**

第5回幼児教育実践学会で個別指導を取り入れた特別支援教育について紹介した。今回は、特に個別指導時の幼児の様子を保護者に報告したときの教師と保護者のやり取り(情報交換、共通理解、連携など)に焦点を当てて研究を行った。さらに、幼児の姿の変容、園内の教職員の支援に関する意識の変化(本務教諭だけでなく補助教諭も含めて)、外部の療育機関との連携における個別指導の意義などについても調べた。

②⑨ 千葉県:柴田茂樹(健伸幼稚園教諭)、梨羽ゆみ(健伸幼稚園教頭)

テーマ:Kくんの3年間の記録を通じて

入園から1ヶ月経ち、一日中同じ場所で立ち続けているKくんという子がいた。遊ぶわけでもない、泣くのもなく、ただただ無表情で一日中同じ場所に立ち続けていた。Kくんは3年間の園生活の中でおそらく問題なくそれなりに育ち、卒園していくのであろう。目立たないからこそ、たくさんのことを見落としてきた子たちは沢山いるのではないかという気づきから、一人ひとりの育ちを最大限に促しているのだろうか、という疑問につながった。Kくんという「なんとなく気になる子」に焦点をあて、エスノグラフィーという手法を用い、Kくんが結果どういふ成長を遂げ、何が成長の要因だったのか、家庭における課題と解決策を含めた一つの研究を行った。

③⑩ 大阪府:岡本歩維(幼保連携型認定こども園御幸幼稚園・さくらんぼ保育園主任)、小谷卓也(大阪大谷大学准教授)、辻 弘美(大阪樟蔭女子大学教授)

テーマ:幼児期のかがかくする心の育ち

- 1.かがかくあそびの目的を実現する保育環境の工夫・子どもの興味・関心
- 2.共に考える場作り・アイデアを出したり問題を解決しようとする体験
- 3.保育者の援助・子どもたちの視点にたった援助と環境の工夫
- 4.記録をとる・エピソード記録や、写真ビデオなど記録を考察してまとめる。

3年前より『気持ちを表す言葉』を育む研究を辻弘美教授と協同研究をしてきました。こどもの心が動く活動・心の動き・子どもの表現を広げる足場づくりをかがかくあそびをとおして研究していきます。

③⑪ 静岡県:杉本仁美(常葉大学短期大学部附属とこは幼稚園教諭)、北村静香(常葉大学短期大学部附属とこは幼稚園教諭)、久保田彩乃(常葉大学短期大学部附属とこは幼稚園教諭)

テーマ:保育観の変化～園内研修を通して～

- 1.これまでの保育/ 教師が計画した保育を、教師主導で行っていた。平成22年度より園内研修を通して自園の保育を見直し始めた。
- 2.変化の中身/ 子ども主体の保育となり、保育記録も時系列から一人一人の姿や内面が見える形へと変化していった。
- 3.現在の取り組み/ 平成26年度～27年度の2年間で保育記録を通して見えてきた子ども同士の関わり(異年齢)に重点を置いて保育を行い園内研修を通して振り返る。

③⑫ 神奈川県:内山敏和(学校法人鴨居学園鴨居幼稚園主幹教諭)、野口優花(学校法人鴨居学園鴨居幼稚園教諭)

テーマ:自園文化の深化～合作活動をヒントに～

私立幼稚園にはその歴史的背景から各幼稚園独自の様々な文化が存在し、本園にも行事や生活などの中に様々な文化が存在している。幼稚園の中に文化として根付いている活動は教師の入れ替わりや時代の変化と共に表面上の取り組み(形骸化)になる危険を持っている。今回の発表では過去数年間の合作活動を振り返り、その活動が支える育ちを改めて見つめていきたいと考えている。

③⑬ 神奈川県:橘 明子(平和学園幼稚園園長)、内山佐代子(平和学園幼稚園)、一色里絵(平和学園幼稚園)

テーマ:遊びから発展する子どもの育ち 年長児の生活 みんなちがってみんないい

本園の年長組は2クラスで構成されている。それぞれカリキュラムに沿った活動もあるが、日々の遊びの中からもたくさんの活動が生まれている。自分たちで生み出した遊びだからこそ、子どもならではのアイデアで活動が発展し遊びがどんどん展開している。また、その中から子どもたちは多くのことを学んでいる。教師からの誘導や強制がない活動だからこそ、子どもたちが自由に遊びを発展させ一人ひとりの個性が豊かに表現されている。こういった活動こそが、子どもの育ちを豊かにする。

③⑭ 兵庫県:志方智恵子(認定こども園七松幼稚園副園長)、亀山秀郎(認定こども園七松幼稚園園長)、難波景子(認定こども園七松幼稚園主幹保育教諭)

テーマ:幼保連携型こども園の教育標準時間後の保育実践

本園は平成28年度から幼保連携型こども園に移行した。移行することにより、1号認定児と2号認定児が同じ場所で預かり保育を行うこととなった。また、同時に3号認定児の保育も始まった。そこで、本発表では、教育標準時間後の乳児と幼児の保育実践を報告する。

③⑮ 兵庫県:吉村幸久(認定こども園七松幼稚園非常勤体育講師)、亀山秀郎(認定こども園七松幼稚園園長)

テーマ:36種類の基本動作を幼児が経験することのできる環境づくりの検討

幼児期の運動機会の減少や能力の低下が危惧されている。その中で現在の本園在園児が生活する環境の

下、36 種類ある基本動作について、何が経験し辛い動作であるかを調査する。そして、どのように経験し辛い基本動作を環境(人的・物的)を通して経験できるかを発表する。

- ⑳京都府:荻野和美(泉山幼稚園主任教諭)、森山佳織(泉山幼稚園教諭)、福多朝子(泉山幼稚園教諭)

**テーマ:ラーニングストーリーを実践して**

ニュージーランド発のラーニングストーリー。本園では、子ども達一人ひとりの学びを写真と担任からのコメントと共にファイルに綴り、月に一度持ち帰ることで、家庭に保育の本質を伝え、子どもの成長を共に支えていこうと考え、“学びの物語り”と名づけ、取り組んでいます。伝えるばかりではなく、保育者が子どもを理解する力や次の保育を構想する力を養うことにつながっていると実感しています。そんなラーニングストーリーの実践内容を発表したいと考えています。

- ㉑四ツ釜雅彦((公財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構調査広報委員会委員長)、岩立京子(東京学芸大学教授)、波岡伸郎((公財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構調査広報委員会編集委員)、前田幹((公財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構調査広報委員会編集委員)

**テーマ:現代の子どもの生活実態調査**

(公財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構・調査広報委員会では現代の子どもの生活の実態を把握し、子どもの育ちにとってより良い環境とは何かを研究するために幼稚園 12 都道府県、24 園(回答 3,782 人/86.3%)、認定こども園 10 都道府県、10 園(回答 1,570 人/86.1%)に対して「現代の子どもの生活実態調査」を実施しました。調査結果をもとに、幼稚園と認定こども園の比較、または、平成 21 年度の調査との比較により生活実態の変化などを考察します。

- ㉒福岡県:柴 美帆(浅川幼稚園副園長)、池 俊子(浅川幼稚園)、中原智美(浅川幼稚園)

**テーマ:5 歳児 こいのぼり協同製作**

本園では、一人ひとりの子供が将来、調和のとれた人間に育つための基礎づくりを目指した“集団づくり”を保育計画の中心にしています。4 歳児より、グループ活動やリーダー育成を行い、集団作りをテーマとして劇づくり、お店屋さんごっこ、鬼ごっこなどに取り組んでいます。今回は、年長になって初めて、クラス全員で「こいのぼり協同製作」をテーマに取り組み、子供たちが考え合い、話し合い、協力し合って成長していく様子を発表します。

- ㉓神奈川県:喜久里やよい(西鎌倉幼稚園主任)、内田孝志(西鎌倉幼稚園主任)、佐藤典子(西鎌倉幼稚園教諭)

**テーマ:園内研修(フォトセッション)への取り組み～実際に取り組んだ研修内容の報告と、園内研修を進める中での課題～**

西鎌倉幼稚園では園内研修として、毎月フォトセッションを行っています。保育の場面(写真)を話し合いの題材とし、子どもの姿や成長、又は園内環境について学びあっています。また、園内研修のあり方にも問題意識を持ち、より良い研修内容を模索する機会も設けています。それらの時間を通して、子どもたちの「こころもち」に寄り添う保育を目指し、個々の学び・気づき、また職員間で大切にしたいと感じ・共有した事など発表します。

- ㉔福岡県:國武裕寛(神理幼稚園副主任)、福本龍太郎(神理幼稚園教諭)

**テーマ:心が動くあそびとは**

「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である」という幼稚園教育要領を念頭に、日々の保育を実践しており、子どもたちが「おもしろそう」「どうしてかなあ」「やってみたいなあ」と、心を動かす事が遊びのきっかけとなると考えている。日々の園生活でみられる「行事」「絵本」「社会事象」をきっかけとした遊びを取り上げ、子どもたちの心の動きと遊びの展開の流れを可視化しふりかえった。

- ㉕奈良県:宮本忠史(畿央大学付属幼稚園園長)、柴田 満(畿央大学助教)

**テーマ:食育活動の実践について**

幼児期における食事の特徴として、好き嫌いが挙げられる。幼稚園での好き嫌い解消のための食事介入は、家庭間の差をなくし小学校へ向けてのステップとして重要であると考え。本園は、委託給食会社の担当者から、給食の残食が他の幼稚園と比較して非常に少ないことが毎年報告されており、好き嫌い解消のための取り組みが効果を発揮していると考え。そこで、給食時間の保育者と園児の取り組み、年間の食育イベントなど、本園の食育活動の実践を報告したい。